２０２３年５月２８日　青砥教会　説教『聖霊降臨』　　高橋克樹牧師

聖書　創世記１１章１～９節、使徒言行録２章１~１１節、ガラテヤ書６章１～１０節

ペンテコステは、同じ場所に集まって祈っていた弟子たちに聖霊が降るという出来事を通して、教会が形成されたことを記念する日です。けれども、使徒言行録を丁寧に読んでみると、復活したイエスが弟子たちと話しているときに、既に弟子たちは使徒と呼ばれています（１章３節、同６節）。

そして、聖霊が降ると『あなたがたは力を得る』（１章８節）とイエスが預言していたので、エルサレムで弟子たちが集まっていた家の「上の部屋」で熱心に祈っていた彼らは聖霊が降るのを待っていたのでした（１３～１４節）。聖霊が注がれる前の段階で、既に弟子たちは使徒としての自覚が与えられていたのです。このように、使徒言行録の最初の部分で弟子たちが使徒と呼ばれているのは、彼らが十字架刑死を前にして逃げてしまった弱い弟子ではなく、福音を宣べ伝える自覚と責任性を持った使徒たちに既になっていたということです。

聖霊降臨の前に、組織的な話し合いによって使徒マティアが選出されていることをみても、聖霊降臨の前に教会の働きが既にあったのです。まず確認しておきたいことは、聖霊が降臨しなければ教会の働きが生まれないという先入観を持ってはならないことです。

さて、２章３節で炎のような聖霊が『現れる』（ホラオー）と訳されていますが、この原語ホラオーは通常「見える」と訳される言葉で、弟子たちには聖霊が舌のように分かれて自分たちの上に降りてくるのが「見えた」のです。聖霊が『分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった』（同３節）とあるように、聖霊は人間それぞれの個別性に合わせて、「異なる舌」（４節の「ほかの国々の言葉」の直訳）のようになって降ってきたのです。これは神の意思が一人一人にふさわしいかたちで、神の意思を示すために聖霊が降ってきたことを示しています。

神の意思が聖霊を通して異なる舌で語らせ始めた（２章４節）のは、聖霊が弟子たちにいろいろな言語で神の意志を伝えたということです。ですから、それは弟子たちがバイリンガルになったということではありません。様々な言語で福音が弟子たちに語られたことが奇跡的なことだったのです。教会が形成される前に、弟子たちにそれぞれ神の意志が聖霊によって伝えられたのです。

信仰者は聖霊に導かれて歩む者となったのです。だから、霊の人として生きている自覚を信仰者は持つにいたったのです。ところが、この霊の人になったという自覚が教会内で問題となることが起こったのです。ですから、パウロはガラテヤ書６章で、『兄弟姉妹たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、霊に導かれて生きているあなたがたは、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい』（１節）と言わなければならなかったのです。柔和な心で正しい道に立ち帰らせるとは、優しい言葉で注意をするということではなくて、互いの重荷を負い合う業を通して自分の信仰の質を正していくということです。

人間は信仰によって救われたとしても、生きている限りやはり「罪過」に陥ることがあります。根源的な罪はキリストの贖いによって赦され、取り除かれたとしても、全く「罪過」を犯さなくなることは困難です。いわば罪という植物の根は切除されたとしても、花はなお咲き続

けているのです。

というのも信仰者は時に無自覚に、時に意識的に「罪過」を犯してしまうからです。ですから、聖（きよ）められることを求めて祈り続けなければならないのです。救われたとしても、なお聖められねばならないものが私たちの中にはあることを率直に認めなければなりません。パウロは「霊の人」を自認する信仰者が、この自覚を持っていないことをガラテヤ書で指摘しているのです。

洗礼を受けるとき、聖霊によって聖められたことを宣言します。救われたことによって聖霊が下されて霊の人になるのですが、霊の人になったことで、聖（きよ）められた存在としてずっと生きていけるわけではないのです。悪の花は咲き続けていくからです。

つまり、信仰によって新しく生き始めた人が自分でも気づかずに陥る傲慢さや、押しつけがましい自信に溢れた態度を持ってしまうことがあるのです。また信仰の弱い者を裁く言葉を他人に向けて発するようなこともしてしまいます。これらのことは、宗教的な確信に裏付けられているだけにしまつにこまるものです。いわば信仰のあだ花というものです。ですからパウロは『互いに重荷を負い合いなさい』（2節）と勧告するのです。

それは、信仰者が自分の罪過の芽を生涯にわたって摘み取っていく作業をしていく責任性があることを指摘した言葉です。キリスト教信仰においては、この自己点検的な内省がなければならないのです。そしてそれを保証するものが聖霊なのです。聖霊は神の意志がそれぞれの個人的な必要性に応じて示されるものですから、聖霊の導きを信仰生活の中で実感して、自分の信仰の質を内省していなければ、独善的な信仰スタイルに陥ってしまいます。

しばしば熱心な信仰スタイルで教会員の信仰を束縛するキリスト教宗派があります。聖霊に「さま」をつけて「聖霊さま」と表現することで、三位一体の「神さま」「キリストさま」と同じように聖霊を「聖霊さま」と人格的に表現するキリスト教宗派がありますが、そこでは確かに熱心な信仰に生きながら、「自分への恵み」が誇らかに語られるのですが、「互いの重荷を負い合う」という証しが乏しい信仰スタイルにとどまっていることが往々にして見受けられます。信仰は具体的に互いの重荷を負い合う交わりがなければ、きれいごとでしかありません。

主イエスが十字架につかれる前夜、弟子たちに残された「律法」があります。『あなたがたに新しい掟を与える。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい』（ヨハネ福音書１３章３４節）。ここでの互いに愛し合いなさいとは、互い尾重荷を負い合うことです。互いの重荷を負い合う業の中に、聖霊が信仰者個人に働いて、その信仰の質をキリストの律法に従って見極められるのです。神は、信仰者であるわたしの究めるために聖霊を送ってくださっているからです。もし、聖霊によって自分への恵みばかりが誇られるならば、それは聖霊の働きを他ならぬ自分自身が排除しているのです。

互いの重荷を負い合うことは具体的な信仰の現実場面では難しい業ですし、困難に思えることに直面することになります。でも、自分の力ではできないことだからこそ、聖霊が可決の道筋を示してくれるように導いてくれるのです。このような聖霊の働きに委ねて信仰の馳せ場を歩んでいきたいものです。